

毛澤東思想における「群衆」の考察

松 尾 善 弘

(一) 譯語補完の意義

中國語を習いはじめのころ、「火車」や「汽車」の意味をとりちがえたり、「娘」や「聞」「老婆」などを日本文字のそれと錯覺して笑われた経験は誰しもがもつていよう。そういう間違いは文字面のみを見て中國語を學習しようとする惡弊によるものだ、という議論はさておいて、このような單純で具體的なことは、すぐそれを訂正できるし、まだご愛嬌ですまされる。

しかし、「服務」や「領導」をたゞちに日本語の「奉仕」や「指導」に譯しかえて能事しれり、という顔をされると、ちよつと首をかしげたくなるし、「活埋（軟禁）」をそのまま「活き埋め」として仰々しく書きたてた、となると、ことはそう簡單ではなくなる。殊に哲學思想關係の、嚴密さを要求されることばの場合は、とりわけそれらが抽象的なものであるために、適確な譯出をすることは非常に難しい。毛澤東思想も、譯語の不完全さによつて誤解を生じ、深刻な論争を呼ぶという事態がしばしば起つてゐる。

「意味論的にいえば、言語の意味は、技術の意味と、イデオロ

ギーの意味との二種に區別される。前者は、言語現象である。だから客觀的な記述にたえる。二つの、ことなる言語體系間に、移しかえられるものは、主として、この技術の意味である。（中略）言語のイデオロギーの意味は、現象としてとらえることはむづかしい。それは、はなはだ主觀的であり、直觀的である、いわゆる記述の方法をもつてしては、客觀化しにくい。

中國語は、比較的、このイデオロギー性において豊富である。だから概念を抽象化するよりも、個別化し、具體化する。そうしなければ、傳達は多様に行われて、言語の社會的機能が混亂する。（中略）

その言語を、思考の手段とする中國民族は、比較的抽象概念の操作につたない。だから、體系的であり、かつ觀念論的な哲學的思辨にはふむきである。（『中國文學の翻譯と中國語教育』工藤篁「文學」一九六七・三二八頁）

このように、中國語は、本來、技術性よりも、その言語を通じてしか意味を直觀しえない、イデオロギー性に豊富である。従つて、中國の言語によつて、思考を表現する文體を、他のことなる要素を

もつた文體に、移しかえることは原則として不可能なことだ、とさえいわれる所以となつてゐる。

だが、たとえそうだとにしても、そのことによつて、直ちに、翻譯の作業は不要であるとか、我われの頭腦で消化した中國の學問の内容を、周圍の人びとに還元していく義務が消滅してしまふ、ということにはならない。むしろ、譯出上の不備を見越して、更にそれを補充していく作業を併せ行わねばならないのではないか。しかも、それは高度に發達した資本主義社會に位置する我われの立場から、古今を問わず、ある種のことばの概念を明らかにする必要があるのではないか。そう私は考えてゐる。

(二) 「人」「人們」「人類」に關して

古來、中國の思想は、人間に對する深い省察の記録である、といわれてきた。私もその定説に異存はない。しかし、それとは若干ニュアンスを異にしたところで——というのは、年代的にもごく最近の狀況に關するもので——このごろ、中國民族の、人間本位のものの見方、という事實に改めて氣付かされてゐる。例えば、A・スמידレーの『中國の歌ごえ』に、婦人記者が二人の「小紅鬼」に勉強を教えるくだりがある。

「その時、少年達の持つていた、ゲリラ隊編集發行の教科書は、(中略)まず、「人間」ということはからはじまり、つづいて「労働者」「農民」「兵士」という單語を教え……」(筑摩書房版、一五九頁)

そのほか、我われが現在使用してゐる種々の中國語教科書も、開卷第一頁の單語は、「毛主席」は別格として、大體、先ず「人」或

いは「工人」に始まり、つづいて「農民」「米」「面」というぐあいに排列されている。最初に「人間」そして「食物」「衣物」という基本的なものの考え方がそのまゝ表われていておもしろい。「さくらさくら」「こまいぬさん、はい」式とは根本的に異質であることを考えさせられる。

この「人間に關することばは、特に古代の文獻において、「卿・大夫・士・庶人」を初め、「君子」「聖人」など、その社會的位置關係を明らかにする研究がかなり行われてゐる。そして、どういふ立場の人間がその説を述べたか、ということが、かなり重要な問題として取り扱われてきた。

ところで、ここでは、先ず「人」「人們」「人類」を、毛澤東選集に限つて拾つてみて、主として譯出上の問題として、若干眺めてみようと思ふ。

細かな問題にはいる前に、一言結論めいたことを述べると、毛澤東は、この人間或いは人間事象をも、決して階級を離れたものとしては見ていない。人間一般・人間性・愛というものの、そういう抽象的觀念的なものとしてではなく、必ず一定階級の人間やその事象だとみている。これは社會が人間に與える客觀的性格であり、この階級性にしたがつて人は敵對關係に置かれる、という見方をしている。「誰は我們的敵人」「什么是人民、什么是敵人」という發想、つまり、社會が我・友・敵の對抗關係であるというみかた、それが彼の意識の出發點である。

この點については、おいおい述べることにして、大まかに「人」ということばを以上のようなぐの中ですべて捉えておいて、『實踐論』『矛盾論』を中心に、頻出する用語例を擧げて考えてみよう。

まず「人」の方には、「人的社會性」、「人的認識」「人和自然的關係」「社會的人」「人在實踐過程中」「敵人」「革命黨人」「何人」「古人・外人」等々がある。これらに對する日本語譯は、「人・人間、人々、同志、員、もの」などである。同じく「人們」の方も、「人們的認識」「人們達到了」「使得人們的（「先生們」）などで、譯語は、「人びと、人間、人たち、人」などである。譯語は新日本出版社本（A）と國民文庫本（B）とを参照した。A本は「人」を「人間」、「人們」を「人びと」でほぼ一貫して譯出しているが、B本は、「人」も「人們」も「人間」であつたり「人々」であつたり交錯している。毛澤東は「人」と「人們」を意識的に區別して使用している、という論を展開しようというのではないけれども、一般的に言つて、譯出する場合は、やはり「人」は一應「人」または「人間」と譯すのが妥當ではないだろうか。勿論、場合によつては譯出しないこともあり得るし、生硬な感じを避けて適宜にいい代えることも可能ではあるが、あまりに勝手な譯しかえは許されない。というのは、例えば、「共產黨人」には同じく「共產黨員」という言い方もあつて、一律に「共產黨員」と譯してしまつと、共產主義思想、共產主義者としての行動その他をふくめた抽象概念としての「共產黨人」、例、「換取共產黨人的進步的鬥爭思想」、「反對本本主義」と、文字どおり具體的な個々の黨組織の一員をさす「黨員」例、「我們的黨……命令自己的黨員站在抗日戰爭的最前線、……（愛國主義和國際主義）」とのちがいがならされてしまうからである。

「人們」の方も、一般的個別的な一定數の人、という意味をもつから、原則として「人びと」で統一すべきであらう。多分ミスだしか考へられないが、B本の如く、「人類」という語をも「人間」と不用

意に譯されると（「人類社會的生產活動」↓「人間社會的生產活動」「實踐論」、原文の「人」「人們」「人類」の區別がなくなつてしまふ。毛澤東は、「人們」と「人類」を、次の例文のように嚴密に區別して用いている。「這個規律、不論在自然界、人類社會和人們的思想中、都是普遍存在的。」（關於正確處理人民內部矛盾的問題）

「人類」の用語例も、「人類的生產活動」「人類社會的」「人類歷史」「人類物質生活」「人類認識」「世界到了全人類」等々、あげればきりがなが、要するに、一般的歴史的な、他の動物との區別を強く意識する、いわゆる「ホモ・サピエンス」の意味で用いられている。「思想等々は主觀的東西、做或行動是主觀見之于客觀的東西、都是人類特殊的能動性。（中略）是、人之所以區別于物的特點。」（論持久戰）。「人類」ということは、このように、あらゆる要素を包括した「人」（人間）という概念の範疇の中で、特に他の動物との區別という側面と、超歴史的超民族的な本能的な人間という側面をより明確に具えたことばである。そして、私の見る限りでは、この「人類」の概念には、新島淳良氏の指摘する、「中國語の『人類』は個々の人間との區別、社會的な階級的な人間というイメージをもあたえることばである。」（毛澤東の哲學「傍點引用者」）という意味は、むしろ含まれないと考へる方が妥當であると思う。現代社會を構成する人間及びそれに類することば（特に毛澤東思想におけるそれ）は、必ず階級意識を含んでみなければならぬ、とするのが私のこの論の目的でもあるが、人間一般を巨視的にとらえた中でのこの「人類」については、むしろ階級性をもたせない方が、より對照的に闡明に理解できる。必要にして十分な一例をもつてその證左

とする。「在沒有階級的社會中、每個人以社會一員的資格、同其他社會成員協力、結成一定的生產關係、從事生產活動、以解決人類物質生活問題」。(「實踐論」傍點引用者)

(三) 「人民」概念について

「人民」の概念に關して、毛澤東はみずから「關於正確處理人民內部矛盾的問題」の中で、次のように述べている。「人民這個概念在不同的國家和各個國家的不同的歷史時期、有着不同的內容。」すなわち、人民の概念は、それぞれの時代、それぞれの國家において、その内容を異にするのであると。そして毛澤東は一九五七年に書いたその文の中で、「人民」を次のように規定してみせる。

「抗日期」においては人民とは、「一切抗日階級、階層和社會集團」であり、「日本帝國主義、漢奸、親日派」が人民の敵であつた。また「解放期」においては、アメリカ帝國主義、その走狗、官僚資產階級、地主階級とその代表、國民黨反動派が人民の敵であり、上記に反對する一切の階級、階層、社會集團が人民であつた。そして「社會主義建設期」においては、一切の社會主義建設に参加する階級、階層、社會集團が人民であり、社會主義革命に反抗し、社會主義建設を敵視し、破壞する社會勢力と社會集團はその敵である、と。

更にさかのぼってみると、「論反對日本帝國主義的策略」(一九三五年)の中に、勞働者、農民、都市小資產階級の連合政府「工農民主共和國」が、「人民共和國」に移行したことについて述べている部分がある。そこでは、「人民共和國」とは、「工人・農民是這個共和國的基本大衆(中略)人民共和國政府以工農爲主體、同時容納其他反帝國主義反封建勢力的階級」である。つまり、それは勞働者・

農民・小ブルジョア及びその他の階級中の民族革命に参加する分子の連合政府である、と説明している。

中國の人民とは何か、そしてそれは何に壓迫されているのか、という問いに對して、このように、敵味方を峻別する關係で説明しようとする毛澤東の考えは、更にそれを原型にまでさかのぼつてみればより明確になる。即ち、毛澤東が黨員として最初に書いた論文、そしてそれが理論指導的黨員の出發となり、同時に彼のその後の革命運動理論の基礎となつた「中國社會の階級分析」(一九二六年)である。それによると、中國社會には五階級があり、最右翼が第一の「地主と買辦の階級」、これは帝國主義と封建勢力の野合形態で、中國社會を半殖民地半封建として性格づけているものである。この壓迫を集中的全面的にうけるものが第五の最左翼「産業プロレタリアートと農村プロレタリアート(雇農)」である。中間に第二の民族ブルジョアジー、第三の都市小ブルジョアジー、第四の、農村半プロレタリアート(自・小作農)がならぶ。さて中國社會に生きる人間の大多數をしめているのは第四の農村半プロレタリアートと第五のプロレタリアートである。彼らは同じ地主買辦階級に支配され收奪されている。彼らはこの階級制度を倒さないかぎり浮かばれない。この大多數の中國人、これが中國人民大衆である。第一の階級が「敵」であり、第二第三の階級は、中國全社會の階級的緊張關係の變化によつて、「敵」と「我」との間を浮動する。そして「我」が「敵」を倒して革命しようとする際には、これを「仲間」友」にしなければならぬ。だが革命において必然的に徹底して闘うのは、いうまでもなく、第五のプロレタリアートであり、これが革命の指導力となる。

このように、「人民」ということは、時間的空間的な一定の制約のなかで、民族性と階級性という強烈なライトの照射下でとらえられなければならない。そうしてはじめて、民族統一戦線としてたゞかわれた中國革命の根本原理もその一部分が理解できるといえる。

この人民概念について、敷衍すると、野村浩一氏に、次のような解説がある。

「だが、中國において、その「人民」概念が、ヨーロッパにおけるような、何らかの意味において、(階層的な關係概念として成立するところの——引用者注)「公」——「私」の二元的カテゴリーを内にはらんだ「市民」としてではなく、またもちろん臣民としてではなく、つねに壓迫に對する抵抗、抑壓に對する被抑壓者の連帶という形で成立する根據は、もとよりここ(白色勢力等々の外的壓力に對する闘争の中で共通の利害をもつこと——同)にある。そして、つけ加えれば、その限りにおいて、この「人民」概念は、やがてより廣く全世界の被抑壓民族、被抑壓者との連帶へと擴がつて行く。」(『毛澤東思想の形成とその特質』(中)『思想』一九六八・四)

考えてみると、このように、中國における人民概念あるいは被抑壓者の連帶概念が、最もラディカルな形態(抑壓者に對する抵抗、戦争)を通してしか成立し得なかつたところに、逆説的になるが、多くの不幸の原因もあつた。毛澤東の言うように、「戦争が農民をきたえる」(組織をもち規律のある、意識の高い人間になつていく)(井岡山の闘争)ことが一面の眞理でもあつてみれば、「自分達の住む村や山のこと以外は一つ知らぬ農民達」(A・スメドレー『中

國紅軍は前進する』)を情容赦もなく引き摺り込んで、否も應もなく、人民概念、即ち抵抗意識を覺醒させたという側面も、結果的にはあながち認めないわけにはいかないのである。そして、この悲慘な醜惡な戦争を、我われは「人民」戦争(①階級戦争、②民族戦争)と呼ぶ。

「人民戦争はロマンチックな戦争ではない。うたがひもなく人民戦争は、すでに野蛮な戦争というものの本質を、いつそう野蛮にするものである。民族的な侵略のまつたただなかで戦われるときには、こうしたかたちの戦闘は文明的な戦争のいわゆる戦争法規をすべて蹂躪してしまう。ところが、内戦と結びついて戦われるときには、人民戦争は階級戦の様相をとらざるを得ない。こうなると人民戦争は、いままでに知られているどんなかたちの戦争よりも熱情的、殘酷、かつ個人的になる。(J・ベルデン『中國は世界をゆるがす』三五五頁)

最後に一言つけ加えると、「人民」ということは、「國民」ということとは對照的である。「人民」の範疇では、いわゆる「一部」走狗集團」等が決して同列において考えられない。それとは反對に、まさに中華人民國民政府が「富翁」の代表であつて決して「老百姓」を代表したものではない、という點に示される如く、「國民」の概念では、「老百姓」が絶対に「富翁」と同列において考えられていなかつた。そうしてみると、「國民」は「人民」と對照的であるというより、並列しても同一次元でも語れないことばである、といった方が適切かも知れない。

四 毛澤東思想における「群衆」の意味

「大衆」ということばについて、駒田信二氏は、その著『對の思想』に小論を収めている。氏の目的とするところは、「大衆」という漢語は民衆を意味する語として古くからあつたという事實、また梵語の「マハー・ビクシュ」の漢語譯としての「大衆」は「多數の僧侶」の意味であるということ、わが國の軍記物に見える「大衆」という言葉は、僧侶の世界における、今日の言葉の意味での「大衆」であるということ、以上の三點を明らかにすることにあつた、(七五頁)ということである。

「大衆」ということばそのものは、確かに古くは『禮記』『月令』に、『孟春之月……毋聚大衆』『孟夏之月……毋起土功發大衆』などとあり、『荀子』や『管子』にも農民とか農民兵の意味であらわれている。だが「大衆」ということばを、單にそれのみをとりあげて、いつごろから使われたとか、誰が使いはじめたかという考證を展開してもあまり意義をもたない。それよりも、そのことばが、どの時代に、どういう體制の中で、どのような概念をもつて用いられたか、というその差異を明らかにさせることの方がより重要なことである。

現在、日本語で「大衆」と譯されているものとの中國語は、いうまでもなく「群衆」及び「大衆」である。さてこの「大衆」ということばについては、黎錦熙氏が『國語運動史綱』『序』のなかで詳しく解釋をしている。今その一部を引用すると、

「中國で「大衆」が「勞農大衆」とか「大衆組織」というようなことばとして使われたしたのは、そう古いことではない。多分それは西洋の小説等が翻譯されるようになって以來のことであり、その原語も「the classes」(平民、下層階級)であつ

た。これは上流階級を意味する「the masses」に對する語で、本來階級性をもつていた。

とあるように、やや武斷的推測をすれば、五四前後あたりを一つの境目として、それ以前とは、階級意識をもつた人びとが口にしたという意味で根本的に異なるのである。

現代中國語の「群衆」ということばは、とくに毛澤東思想におけるそれが、我われの日常使用する「大衆文學」とか「大衆作家」などの「大衆」とはイメージがちがうという一つの根據はここにある。

毛澤東が、「苦しければ苦しいほど依據せよ」(「必須注意經濟工作」と訴えた「大衆」は、何よりもまずその根底に、階級的視點がなければならぬ。つまり、階級分析を加えた上での觀念でなければならぬ。そういうとらえ方をしないで、この「大衆」をいわゆる一般大衆的な、ましてや衆愚的なとらえ方で済ませると、「大衆に學ぶ」とか「大衆を發動せよ」という發想を全く内容を異にしたところで理解してしまふ恐れがある。たとえば、「大衆の中から大衆の中へ」というようなテーゼも、誰が(どのように自覺した幹部なり知識分子が)、どの階級の大衆の中へは入り、指導し學ぶという相互教育をするのか、という科學的分析が前提にされなければ、無責任な行動家の煽動行爲との區別がつけられなくなつてしまふ。

毛澤東は、「群衆」という語を、「貧農大群衆」、「游民群衆」、「失業群衆」、「士兵群衆」、「小資產階級群衆」などと使う。同じようなことばに「工農平民」がある。しかし、ふつう「廣大的群衆」という場合は「農民群衆」を指しており、それはまた即「革命的階級」である。例、「大衆文化、實質上就是提高農民文化」。「中國社會的新舊鬥爭就是人民大衆(革命的階級)的新勢力和帝國主義及封建階

級的舊勢力之間的鬭爭」(「新民主主義論」)。それは同時に、無産階級に領導される「人民大衆」であり、全中國民族の90%以上を占める「工農勞苦民衆」である。

中國革命において重要な役割を擔つたこの農民大衆を、毛澤東は初期の段階で次のように分析している。(1)地主・富農(全體の10%)、(2)中農(20%)、(3)貧農(赤貧20%次貧50%)、(4)湖南農民運動考察報告「一九二七年」。ややつて「怎樣分析農村階級」(一九三三年)では、(1)地主、(2)富農、(3)中農、(4)貧農、(5)工人(雇農)と分析している。若干いふ方を異にしているが、前者の分析においては、その注に、「赤貧は雇農(鄉村無産者)と鄉村遊民無産者を合せて言う」とあり、「次貧は鄉村の半無産階級を指す」とあるので内容は全く同じである。たゞ注意すべきことは、こゝで言う無産階級とは、財産をもたない者、即ち無資産の謂であつて、生産關係においてとらえたところの階級分析でなかつた。しかし、ともあれ前記の「中國社會各階級的分析」を出發點にして、「關於糾正黨內的錯誤思想」(一九二九年)、「中國革命戰爭的戰略問題」(一九三六年)、「中國革命與中國共產黨」(一九三九年)、及び「新民主主義論」(一九四〇年)、「論聯合政府」(一九四五年)にみられるように、次第に完整された階級分析へと進めることができる。これを要するに、第一次國內革命戰爭の段階では、所謂「米ビツ論」にすぎなかつた毛澤東の階級區分論は、第二次國內革命戰爭段階に至つて、生産様式を視座に据えた科學的な分析へと進展しており、抗日戰の段階になると更に精確になつてゆく。今堀誠二氏の言葉を借りれば、

「階級區分については、搾取關係、とくに勞働力の搾取を中心として、各階級の内容を詳細、的確につかんでおり、全階級

を體系的に敘述した點で全く畫期的な業績となつてゐる」。

(「中國近代史研究序說」一七一頁)

毛澤東の分析については、詳細な検討を加えて論述すべきなので、次の機會を俟ちたい。たゞ、こゝで結びとして申し添へたいことは、毛澤東思想の特徴の一つは、その大衆路線なり大衆發動方式である、という場合、少なくともそれは、以上のような觀點を根底に置かなければならないのではないか、いいかえれば、基本的にこのような階級分析に基いてゐる、ということである。

(四) 毛澤東の「大衆」觀について

以上は「人民」「大衆」ということばを補充し、てがかりにしつつ、階級分析を主軸に據えて、毛澤東大衆路線思想を採つてみようとしたものである。もちろん、それらは極めて大雑把で、その一部をも解明したとは言えない。なお多くの資料分析や孫文、李大釗らとの比較も行つて、より精確なものにしていく必要がある。しかし、不十分ながらも、基本的にはこのような方向で理解し、説明できると思う。

ところで、ここまできて、若干視點を移しかえて毛澤東の大衆觀を眺め直した時、細部の點でやや判然としないものが残る。それは、毛澤東の大衆路線が上述の如き階級分析の觀點に據つて立つてゐることは基本的に正しいと認めながら、ではその一つ一つの階級、なにかんづく最底邊の階層として捉えた「遊民」等に對してはどう評價しどのように統一戰線の中に組み込んでいくのか、というところでは完全に説明しきつてゐないのではないかという疑問である。

そもそもマルクス・レーニン主義は、その生誕の時から一貫して

大衆のイデオロギーであつて、常に彼らの利益を表現してきた。しかし、その場合の大衆とは、もつとも先進的な大衆、つまりプロレタリア大衆のイデオロギーであつた。そこでレーニンも、常にまず意識的な労働者に、思考するプロレタリアートに、先進的なインテリゲンチヤに、読み書きできる農民に向つて呼びかけ訴えている。というのも、社會の先進的部分のみが先進的科學の擔い手たりうるからである。しかもこの點こそが「愚昧」なる大衆、即ち小ブルジョアや農民、労働者のもつともたちおくれた部分に依據し、彼らの支持を巧みに利用したファシズムと明確に一線を畫するところなのである。

確かに毛澤東は、マルクス・レーニン主義を中國という風土の中に適切に應用して、偉大な革命を成し遂げる上で重要な「舵手」の役割を果たした。しかもその際、農民層を重視し、農民大衆に依據して闘つたという畫期的特色をもつ。そして革命的大衆に對する上記のような觀點は、意識的に不斷にとり入れて、いわゆるおくれた思想に對して、矯正する爲にしばしば警告を發し指導している。多くの整風文獻がそれである。にも拘らず誤つた思想はなかなか根絶しない。それは裏返していえば、その思想の溫床（經濟基盤）が是正されない限り、必然的に生じてくる性格のものでもある。だからこそ、また常にそれらを克服する手段を講じなければならない、という循環現象としてある。

そこで注意しなければならないのは、例えば、毛澤東の「思いきつて大衆を起ちあがらせる」というテーゼが實行される場合、そこには必ず、「大衆のどの部分を」「どのように」という一定の枠（分析と方式）が想定されねばならない筈である。つまり、そのことに

よつて、豫測されない事態（ゆきすぎ）の招來を未然に防ぎ、過ちを克服するための一つ的手段を講ずることになる。端的に言つて、大衆發動方式は、少なくとも大衆のおくれた部分、ルンペンやボヘミアン・インテリを起ちあがらせるのではない。だからもしこの前提が無視されるならば、その大衆の起ちあがり、幹部が先進的部分に依據して、大衆を次第に總體として起ちあがらせるものではなくなり、自然發生的な暴動と何らみわけのつかないものに化してしまう。

そのように考えてみると、毛澤東の統一戰論において、所謂「敵」と「友」については、その性格づけなり對處の方法なりにある程度見當はつけられるのに對し、「我」については、「貧農」「雇農」「手工業工人」等をどう區別しているか、という邊で必ずしもはつきりしているわけではない。それはもちろん、我々が實感として把握できないことに一斑の實めがあり、今後それらをはつきりさせていく課題として殘されてもいる。だが一面それらはかなり流動的で、定義づけたにしても、現實的にはかなりなゆれがあつたであらうことは想像に難くない。すなわち、「貧農」と「雇農」、「雇農」と「遊民」或いは「手工人」と「遊民」との境目がきわめてあいまいになつてくる。

例えば、「中國社會各階級的分析」における「雇農」の定義はこうである。「いわゆる農村の無産階級は『長工』『月工』『零工』等の雇農を指す。これら雇農は土地を持たぬばかりか、農具もなく、また少しの資金もなく日傭いですごさねばならない。その労働時間の長さ、勞賃の低さ、待遇の悪さ、職業の不安定さは、他の労働者の比ではない」。同じく「遊民」については、「遊民無産者とは土地

を失くした農民と職場をなくした手工業労働者であり、人類の生活で最も不安定なものである。」といつていて、重なる部分が出てくる。又「湖南農民運動考察報告」における、「赤貧」、「次貧」の内容はこうである。「全然資産すなわち土地、資金がなく、完全に生活の根拠を失い、外で兵隊になるか、労働者になるか、或いは乞食となるほかにないものが赤貧。半無産すなわちいくらかの土地・資金をもつが、くいぶちが多く、収入が少なく、一年中辛苦奔走して過ごす、『手工工人』『佃農（小作）』『半自耕農』等が次貧。」しかも注目すべきことは、「此種人在郷村中最感困難者、在農民中和貧農處于同一緊要的地位」と言うように、この「雇農」などが農民運動において重要な位置を占めているのである。

同じようなことが、半無産階級に属する「小手工業者」、「店員」、「小販」等についても言える。たとえば「店員」について「選集」の注釋では、「中國の店員にはちがつた階層がある。毛澤東同志がここで指しているのは店員中の多數を占める部分である。下層店員の部分は無産階級の生活を送っている」と「ことわり」がしてある。さて次の表は、一九三三年一月、工農紅軍學校政治部が彙集・翻刻した、「黨團員須知」と題するパンフレットの「新黨員入黨手續き」（一九三二・二・十一・ソビエト區新黨員入黨手續きとして中央局會議で決議された）の項の一部である。（東洋文庫・陳誠コレクション vol 15）

このパンフ全體からいろいろなことがよみとれるのであるが、とにかくこの部分だけでも、當時の共產黨の社會階級の分析とそれそれに對する評價が一目瞭然である。この規約をすぐに毛澤東に結びつけることはできないが、上述の大衆觀に關わつてくる問題と

被介紹人成份	介紹人數目及其黨齡		候補期		批 准
	一名、兩個月以上	無	地方、紅軍區委・總支部	同	
産業工人・手工・雇農	二名、四個月以上	三個月	同	右	
貧 農	二名、八ヶ月以上	半 年	縣委・師黨務委員會	同	
中農・獨立労働者	三名、一年以上	十個月	同	右	
知識分子（教授・醫師・學生）					

して「ただだけ提起すれば、『作坊』の「工人」や「學徒」、「雇農」、「苦力」に對する絶大な信頼が、その寛大すぎる程の入黨條件の項から一瞥して判る。現實の處理においては、もちろん緩急自在の操作があつただろう。しかしそれでもまだ、この大衆觀が圖式的であり、分析と應用が機械的すぎるといえば、偏見になるだろうか。

紙幅の關係で結論を急がねばならない。

確かに毛澤東は一九三九年の「中國革命與中國共產黨」などでは、見事に完整した階級分析を示しているが、初期の段階では極めて不十分で、一九三三年に書いた「北京政變と商人」（毛澤東未公開重要資料）中央公論、69・7）では、一種の職業上の區分を階級區分とみなし、商人つまり民族ブルジョアジーこそ國民革命の第一の擔い手だ、と述べているほどである。そのころの革命運動も、自ら「革命是暴動」と豪語する如く、流氓や土匪、と眞の革命勢力とのけじめがつけられておらず、いわゆる無目的暴動と、目的と手段をもつた革命暴動との紙一重のところで指導していたのではなからうか。毛澤東思想の基底をなす大衆路線において、いい意味で大衆信仰とまで評價される絶對的な大衆信頼には、しかしその裏にはいくつもの陷阱が待ち受けていて、すれすれのところで行動しなければ

ならない危険が伴う。長い革命闘争の中で上述の如き、大衆觀點における弱點は一應克服されているが、なお拂拭しきれない疑惑が残る。それは今日的意義に關わる問題として更に追求してみなければならぬ。(一九六九・六・三〇)

(大學院博士課程)